

黎明期の北海道支所 —発掘された未公開写真から—

中川 充¹⁾

1. はじめに

地質調査総合センターの前身である地質調査所は、明治15(1882)年に農商務省所属の研究所として設立された。組織はいくつかの大きな変遷を経てきた(地質調査所百年史編集委員会, 1982)が、北海道支所は北海道工業試験所第五部を移管して昭和23(1948)年8月1日に誕生した。初代支所長は坪谷幸六であった(地質調査所百年史編集委員会, 1982)。坪谷は昭和24(1949)年6月に退所している(地質調査所職員録作成委員会, 1983)。

その後、平成13(2001)年の中央省庁改編に伴い、工業技術院傘下にあった15研究所が独立行政法人産業技術総合研究所(産総研)として統合され、地質調査所は産総研地質調査総合センターとなった。地域出張所は統合・廃止され、北海道支所も大幅に縮小され北海道地質調査連携研究体となり、最終的には平成18(2006)年に閉鎖された。

この度、創立当時の庁舎など未公開の写真も発掘したので、埋没を防ぐ意味でGSJ地質ニュースの記事として記録に残すことにした。参考までに現在のGSJ地質ニュースの前身である「地質ニュース」が創刊されたのは昭和28(1953)年3月であった。北海道支所はそれに先立つこと5年ほど前に誕生したことになる。

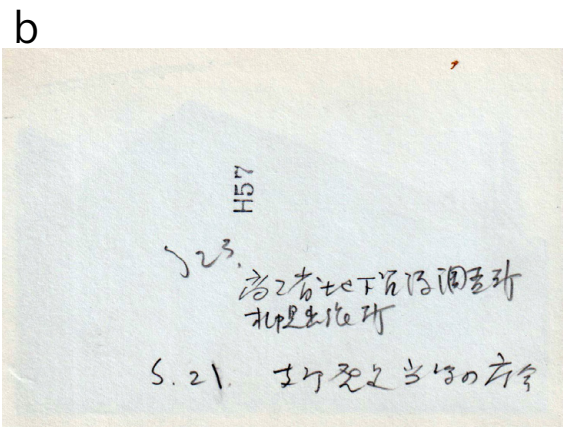
ちなみに、北海道支所から同誌へ初の記事は、探鉱課による北海道南部で「新発見の磁硫鉄鉱床—桂岡鉱山」の

紹介となっている(北海道支所探鉱課, 1954)。

2. 創設期

地質調査所北海道支所の前身は、大正11(1922)年に設立された北海道工業試験場(現・北海道立総合研究機構)の第五部として、昭和5(1930)年に発足した資源調査部で、昭和23(1948)年5月に商工省地下資源調査所札幌出張所に移管された。ただし、新しい庁舎に移ったわけではなく、看板の架け替えのみであったようだ。北海道工業試験場の研究本館は、大正12(1923)年に当時の札幌郡琴似村(現在の札幌市西区八軒1条西3丁目)に竣工している(北海道立総合研究機構, <http://www.hro.or.jp/list/industrial/research/iri/organization/history.html>. 2020年11月2日確認)。この本館は、札幌で2番目に古い鉄筋コンクリート造3階建てで、後に北海道警察第三庁舎として利用され、2003年に取り壊された(札幌建築鑑賞会, <http://makomanayiclub.web.fc2.com/page40709.html>. 2020年11月2日確認)。

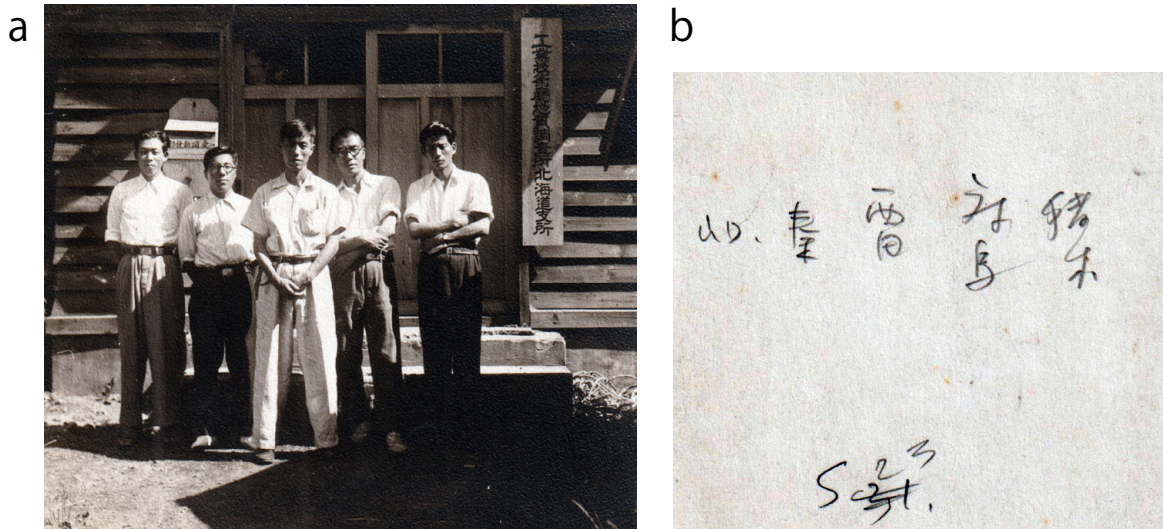
商工省地下資源調査所札幌出張所発足当時の庁舎の写真が第1図aである。撮影者は不明だが、裏書き(第1図b)には「S21 商工省地下資源調査所札幌出張所 S23 支所発足当時の庁舎」とある。当時の構内配置は定かではないが、第五部ということ、周囲に配置された木造2階建て庁



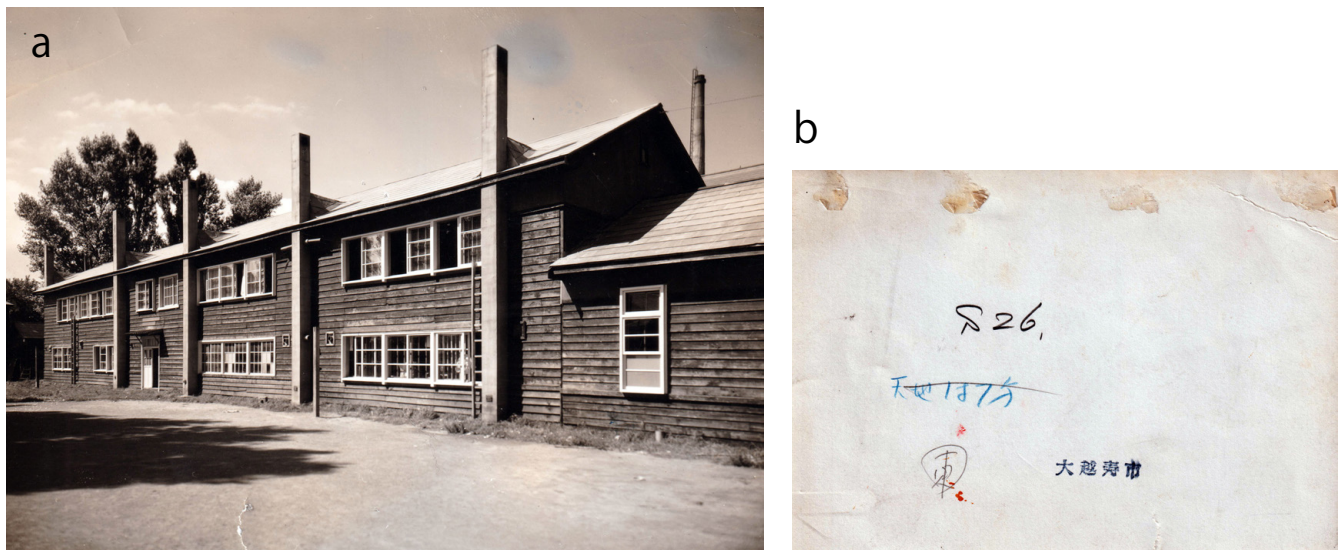
第1図 a: 創立当時の庁舎. b: 写真の裏書.

1) 産総研 北海道センター産学官連携推進室

キーワード: 北海道支所, コンクリート造庁舎, 札幌鉱務署, 航空写真, 地質ニュース



第2図 a: 庁舎正面での集合写真。左より，山口昇一，秦 光男，西田彰一，対馬坤六，猪木幸男。b: 写真の裏書。昭和23年とある。



第3図 a: 昭和26(1951)年の支所庁舎。b: 写真の裏書。

舎を使用していたのであろう。

同じ建物の正面での集合写真(第2図a)には、「工業技術庁(旧字体)地質調査所北海道支所」の看板が認められる。左より，山口昇一，秦 光男，西田彰一，対馬坤六，猪木幸男の地質系諸先達らで，写真の裏書によれば昭和23(1948)年のもの(第2図b)である。いずれも支所創設メンバーである。私事ではあるが，筆者は昭和51(1976)年に新潟大学へ入学した。中央の西田彰一氏は昭和25(1950)年に北海道支所から新潟大学に移り，昭和51(1976)年3月に同大を定年退官した。退官後も教養部の講義を分担しており，筆者も受講していた。「満州で馬を駆って地質調査をした」と話されたのが記憶に残っている。

昭和26(1951)年に支所庁舎(第3図a)は北海道工業試験場の別棟に移転したらしい。後に庶務課長を務めた「大越寿市」氏のスタンプが認められる(第3図b)。そのすぐ後，正確な時期は不明だが，札幌市南1条西18丁目に移転した。「地質ニュース」創刊号(1953年)奥付の窓口案内図には上記住所とともに「札幌通産局内」と記されている。第4図にあるように，路面電車通りに面した建物の南側に付随する形での庁舎であった。

3. 創立十周年

地質ニュース 1958年10月号 (<https://www.gsj.jp/publications/pub/chishitsunews/news1958-10.html>),



第4図 案内図。地質ニュース No.1 (1953) より。



第5図 札幌通産局 北側より撮影 1958年。

2020年11月2日確認)は「特集：北海道の地質と地下資源—北海道支所開設10周年記念号—」となっており、支所の生い立ちも記事になっている(筆者無記名)。ただ、不思議なことにすでに南一条への移転が済んでいる時期の記事にも関わらず、庁舎の写真は第3図aと同じ昭和26(1951)年のものが掲載されている。

支所に残された創立十周年記念のアルバムには、北側から写された「札幌通産局」のコンクリート建物(第5図)と、その南側に位置した木造の北海道支所(第6図)が収められていた(第7図の看板で確認できる)。前者を採用すれば看板に偽りあり、後者はすだれ掛けであまりにもみすぼらしいとの見栄が働き、苦渋の選択だったのかもしれない。

記念アルバムの冒頭には、ページ大に焼かれた白黒写真の「50万分の1北海道地質図」(根本編, 1940)が鎮座している。これは当時北海道大学講師であった根本忠寛氏が北海道工業試験場第五部を主宰する間、両機関の協力の



第6図 北海道支所 1958年。



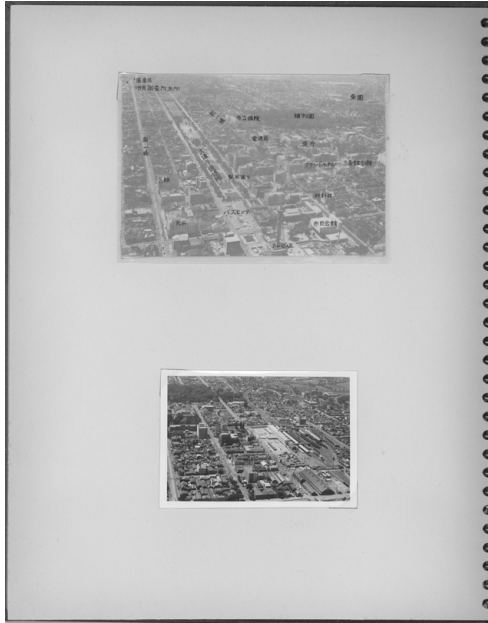
第7図 北海道支所入口 1958年。第6図の一部分を拡大したもの。

下で刊行されたものである。時あたかも戦時下であり、発売直後に軍名で没収され、残部が焼失したという(北海道支所編, 1968)。支所創設十周年式典時の二代目支所長であり、直後に退官した根本氏への畏敬の念を象徴するものであろう。後年、同氏は勲四等に叙せられた(上島, 1974)。

また、同じアルバムには、航空写真が2枚収められている(第8図)。上を覆うパラフィン紙に地名等が書き込まれ、大切に扱われていたことを偲ばせる。上の写真を拡大したものを第9図に示す。テレビ塔上空から大通公園、左上隅に支所庁舎が見える。下は札幌駅周辺で、広い駅前広場と、西側の線路をまたぐ陸橋(上を路面電車が通る鉄道もあった)が映し出されている(第10図)。どちらも東南東から西北西方向へ俯瞰したもので、こんもり暗いのは北海道大学付属植物園の森、その手前に赤レンガ造りの北海道庁庁舎となる。

アルバムには記念祝典や祝賀会の様子が多く残されているが、GSJ地質ニュース誌の性格から掲載を割愛する。

ちょうど3年後の、昭和36(1961)年10月に「札幌通産局」は札幌市中央区北3条西4丁目札幌第1合同庁舎に移転した(経産省北海道産業保安監督部, <https://www.>



第 8 図 北海道支所創立十周年記念アルバムより。



第 9 図 札幌大通りの航空写真 1958 年。第 8 図の上の写真を拡大したもの。



第 10 図 札幌駅周辺の航空写真 1958 年。第 8 図の下の写真を拡大したもの。



第 11 図 刷新されたエンブレム。

safety-hokkaido.meti.go.jp/about/history6.htm. 2020 年 11 月 2 日確認). 以降, 第 5 図のコンクリート造りの建物に支所がスライドしてエンブレムも刷新された(第 11 図).

4. 創立 20 周年前後

地質ニュース 1968 年 6 月号には「北海道支所創立 20 周年記念特集」が生まれ, 支所長の挨拶記事に初めてコンクリート建て庁舎写真が配された(斎藤, 1968). 中央の 3 階部分に切妻屋根が施されモダンになった(第 12 図)が, その時期は不明である.

その後 1969 ~ 1971 年にわたって地質ニュースでは毎月 7 月号に「夏の北海道を尋ねて」の特集が組まれた. 北海道の短いフィールドシーズンに合わせるようにしたのであろうか. 所内に限らず, 関係する大学や機関に所属する執筆陣を連ね(例えば, 在田, 1969; 北川, 1970; 岡崎ほか, 1971)このころが北海道支所の一つの黄金期だったのかもしれない.

5. 平成の移転

昭和 49 (1974) 年の研究棟増築, 昭和 53 (1978) 年の資料標本館落成などを経るが, 庁舎外観に目立った変化なく昭和の終わりを迎えた. 筆者がつくばでの新人研修を終えて北海道支所に赴任したのは昭和 63 (1988) 年の 6 月で, 翌年の 8 月には, 札幌駅北の新設札幌第一合同庁舎への移転が予定されているタイミングであった.

通常業務に移転の準備が加わり, 有意義な初年度であっ



第 12 図 金文字のエンブレムと木製の看板.



第 13 図 閉鎖後の旧北海道支所 1989年 中川撮影.

たことを記憶している。中でも強烈な印象に残っているのが、地下を南に延びる通路の存在であった。戦時下を経験した重厚な建物、実は札幌初の鉄筋コンクリート造一部3階建てで、大正 11 (1922) 年建築の札幌鉱務署(後の札幌鉱山監督局)を出自とする由緒正しきものである。しかしながら、時あたかもバブル時代、文化財としての保存や移設の機運も盛り上がりず閉鎖され(第 13 図)、数年後に取り

壊された。現在では民間のマンションが建っている。

6. おわりに

現在、筆者がシニアスタッフとして勤務する産総研北海道センターでは、60周年誌発行を企画している。定番の航空写真は、今やドローンでの撮影も可能になったので

逆に貴重さが薄れた感はあるが、本稿に収録した昭和 33 (1958) 年当時は相当な事業であったことであろう。

産総研の web サイトでは沿革の紹介文が、「国立研究開発法人産業技術総合研究所(産総研)の歴史は 1882 年に設立された農商務省地質調査所に始まります。」で始まっている(産総研沿革, https://www.aist.go.jp/aist_j/information/history/index.html. 2020 年 11 月 2 日確認)。これに倣えば、北海道における産総研の歴史は、昭和 23 (1948) 年に設立された工業技術庁地質調査所北海道支所に始まったことになろう。昭和 35 (1960) 年創設の北海道工業開発試験所(北海道センターの前身)より 12 年も前になる。

今回、北海道センター図書棟閉鎖に伴う資料整理をご容認いただいた地質情報基盤センターの佐脇貴幸センター長、吉川敏之アーカイブ室長には、本稿執筆の機会もいただきました。また、同室の森尻理恵氏と加瀬 治氏には初期の草稿に目を通していただき大いなる改善が図られました。編集委員のチェックも含め、ここに記して感謝申し上げます。

文 献

- 在田一則 (1969) 黄金道路—襟裳岬をめぐる。地質ニュース, no. 179, 34-41.
- 地質調査所百年史編集委員会 (1982) 地質調査所百年史。地質調査所, 162p.
- 地質調査所職員録作成委員会 (1983) 地質調査所職員録, 地質調査所, 118p.
- 北海道支所編 (1966) 座談会記録: 北海道地質調査の思い出～昭和初期のメモワール～。地質ニュース, no. 166, 11-14.
- 北海道支所探鉱課 (1954) 新発見の磁硫鉄鉱床—桂岡鉱山, 地質ニュース, no. 7, 9.

- 上島 宏 (1974) 根本忠寛氏勲四等に叙せられる。地質ニュース, no. 240, 15.
- 北川芳男 (1970) 道北の自然を尋ねて サロベツ原野 (1)。地質ニュース, no. 191, 20-28.
- 根本忠寛編 (1940) 50 万分の 1 北海道地質図。北海道工業試験場, 北海道地質調査会。
- 岡崎由夫・鈴木順雄・伊藤俊彦 (1971) 釧路市付近と釧路から根室へ。地質ニュース, no. 203, 25-39.
- 斎藤正雄 (1968) 北海道支所創立 20 周年を迎えて, 地質ニュース, no. 166, 2.

参考 Web サイト

- 経済産業省 北海道産業保安監督部の歩み及び沿革 (北海道経産局 Web サイト)
<https://www.safety-hokkaido.meti.go.jp/about/history6.htm>
- 北海道立総合研究機構沿革 (同機構 Web サイト)
<http://www.hro.or.jp/list/industrial/research/iri/organization/history.html>
- 産業技術総合研究所沿革 (産総研 Web サイト)
https://www.aist.go.jp/aist_j/information/history/index.html
- 旧北海道工業試験場写真 (まこまない倶楽部, 札幌建築鑑賞会 Web サイトの一部)
<http://makomanayiclub.web.fc2.com/page40709.html>

※閲覧日はいずれも 2020 年 11 月 2 日

NAKAGAWA Mitsuru (2021) The Dawn of the Hokkaido Branch, GSJ, -Based on an undisclosed photographs-.

(受付: 2020 年 11 月 20 日)